

沖縄戦記述改善についての教科書会社への要請

【この1枚は各社共通】

大江・岩波沖縄戦裁判を支援し沖縄の真実を広める首都圏の会
大江健三郎・岩波書店沖縄戦裁判支援連絡会
沖縄戦の歴史歪曲を許さず、沖縄から平和教育をすすめる会
子どもと教科書全国ネット21
日本出版労働組合連合会
連絡先：子どもと教科書全国ネット21
TEL：03-3265-7606 Fax：03-3239-8590

高校日本史教科書における沖縄戦記述の改善充実を求める要請書

歴史教育にかかわる貴社の日頃からのご尽力に敬意を表します。

さて、2006年度の高校日本史教科書における沖縄戦記述に対する検定問題を契機に、沖縄戦の歴史に対する社会的関心が高まってまいりました。とりわけ沖縄戦の体験が今も語りつがれ、新たな証言もおこなわれている沖縄県では、教科書記述についての関心が多数の県民のなかでかつてなく高まっています。

こうした市民・生徒の関心の高まりは、教科書記述を見直しその改善を実現するうえでの好機でもあると考えます。同時にそのような関心に応えうる充実した教科書記述を実現することは、教科書出版社ならびに教科書執筆者の社会的責務ともいえるのではないのでしょうか。

その意味で、私どもは沖縄戦の歴史とその教育に関心をもつ市民の方々の声をふまえつつ、出版社ならびに執筆者の皆様に対し、失礼を顧みずあえて要望を述べさせていただくことにいたしました。どうか私どもの意のあるところをおくみとりいただき、ご検討の上、なんらかの改善の処置に踏み出していただければ幸いに存じます。どうかよろしくお願い申し上げます。

私どもがアジア太平洋戦争末期におこった沖縄戦についての記述の問題を重視するのは、次のような理由によるものです。

第一に、沖縄戦が国内最大の地上戦となり、県民の4人に1人が犠牲になるというたぐいまれな悲惨な結果をひきおこしました。そのため、戦争の悲惨な事実を学ぶための重要な教材の一つであるからです。

第二に、このような沖縄戦の悲惨な事実のなかには、本来住民を守るべきはずの日本軍によって殺害されたり、死地に追いやられたり、「集団自決」を強いられるなど、特別な住民の被害が発生しました。こうした事実は、戦争と軍隊のありかたやその本質を考えるための重要な教材となっているからです。

第三に、こうした悲惨な事実がおこった背景には、日米双方にとっての沖縄の位置づけ、それにもとづく中央および現地の戦争指導の方針とその責任など、複雑ではあるがきわめて重要な問題が存在し、それらが、戦争の本質を考えるための重要な教材となっているからです。

子どもたちがこれらの点について学び、これからの平和を築く主権者として必要な知識を身につけ、それをもとに考え、成長していくことは、子どもたちの権利でもあります。

したがって、小中高校の児童生徒がそれぞれの発達段階に応じてこれらの問題に接近し思考を深めていくために、教科書においても適切に歴史事実が提示されていなければならないと考えます。

貴社が発行する教科書『現代の日本史 改訂版』には、沖縄戦について次のように記述されています。

敗戦への道

・・・同年3月、東京都の一部であった硫黄島がアメリカ軍により占領され、4月には沖縄本島にアメリカ軍が上陸を開始し、激しい戦闘の末、6月、日本軍はほとんど全滅した(注2)。

注2

沖縄の戦闘で、日本側は民間人約10万人をふくむ約20万人、アメリカ軍は約1万2000人が死亡した。沖縄の師範学校・中学校・高等女学校の男女生徒も、看護隊などとして日本軍に動員され、多くの犠牲者を出した。

現行版について次のような点の改善ないし記述の追加が行われるならば、いっそう沖縄戦の歴史についての理解が深まるのではないかと思います。

- (1) 住民をまきこんだ沖縄戦の実相を、最新の研究成果や住民の証言などをもとに、本文で記述されることをご検討いただきたく存じます。
- (2) 沖縄本島への米軍上陸は確かに4月1日ですが、「集団自決」が多く発生した慶良間諸島への攻撃はそれ以前に行われていることから、3月下旬から沖縄戦がはじまったとする記述が望ましいのではないのでしょうか。
- (3) なぜアメリカは55万もの大兵力をもって沖縄を攻撃したのか、アメリカ側の沖縄戦の位置づけが示されておりません。その点が明確になれば、沖縄戦の悲惨な状況と戦後の沖縄が置かれた位置と関係について理解が深まると思いますが、いかがでしょうか。
- (4) 日本の支配者側の沖縄戦の位置づけが示されていません。一般には、本土決戦準備のための持久戦といわれますが、沖縄を本土とは違う周縁部と位置づけ、その犠牲のうえに本土決戦を遅らせ、本土、言い換えれば天皇制を守るための方針だったとも言えます。このような関係がより明確に示唆される記述が望ましいのではないのでしょうか。
- (5) 日本軍により「壕」を追い出された住民がいたことや、日本軍による手榴弾配布の事実などを記述してはいかがでしょうか。そうすることで、多くの人が確信している「軍隊は住民を守らない」という沖縄戦の教訓がより鮮明になると思います。
- (6) 沖縄戦の実相をより正確に学習するためには、戦闘の妨げやスパイ容疑を理由に、日本軍がおこなった住民虐殺の事実を記述してはいかがでしょうか。
- (7) 沖縄戦の研究成果や体験者によるさまざまな証言から、住民が日本軍によって「集団自決」を強制されたという事実を記述してはいかがでしょうか。
- (8) 最近の研究では「集団自決」を「強制集団死」と表記するケースが多く見受けられます。「強制集団死」という用語の使用をご検討下さい。

なお、いわゆる「集団自決」については、2006年度の高校日本史教科書の検定で軍の強制を示す記述が削除されたところですが、2007年度の訂正申請において、当初の検定による記述の書き換えに若干の修正が行われ、注記においては「強制集団死」の用語の記述も認められました。また、慶良間列島における「集団自決」について元隊長がどのようにかかわったかをめぐる裁判においては、体験者の証言の積み重ねによって、軍による強制が十分にありえたことが判示されています。

以上に述べた点についてご理解いただき、適切な処置をとってくださいますよう、重ねてお願い申し上げます。

貴社が発行する教科書『日本史A 改訂版』においては、沖縄戦について次のように記述されています。

敗戦

・・・アメリカ軍は1944（昭和19）年10月にフィリピンに上陸し、翌1945（昭和20）年2月に硫黄島、4月に沖縄本島に上陸した。日本軍は特別攻撃隊（特攻隊）を編成し、飛行機などによる体当たり戦法を採用したが、劣勢を立て直すことはできなかった。

囲み記事「沖縄戦」

フィリピン・硫黄島を占領したアメリカ軍は、約55万の大兵力による沖縄攻略に着手し、1945（昭和20）年4月1日、沖縄本島中部西海岸に上陸した。日本軍は、沖縄を本土防衛の最前線と位置づけて約8万の部隊を配置し、地元でも一般市民を「防衛隊」に、中学生・女学生を「鉄血勤皇隊」「学徒隊」に動員するなど、計約10万の守備軍を編成していた。4月6日、戦艦大和が瀬戸内海から沖縄へと出撃したが、翌日には米軍機の集中的な雷・爆撃を受け、目標はるか手前の東シナ海で沈没した。また、沖縄海域に群がる米軍艦艇に対して、日本軍の特攻機の体当たり攻撃が繰り返された。アメリカ軍は沖縄本島に海と空から大規模な砲・爆撃を加えたが、地上戦では軍・住民ぐるみの激しい抵抗を受け、上陸地点から10キロ南下して首里を占領するのに2カ月を要した。この間に日本軍の兵力は半減した。島の南端に追い詰められた残存部隊は、アメリカ軍の火焰放射器を使った徹底的な掃討作戦にあい、「女子学徒隊」も集団自決に追い込まれた。6月末までに日本軍の組織的抵抗は終わった。島の南部では両軍の死闘に巻き込まれて住民多数が死んだが、そのなかには日本軍によって壕を追い出されたり、あるいは集団自決に追い込まれた住民もあった。沖縄戦による死者は、日本側が軍人・非戦闘員それぞれ9万人余り、アメリカ軍1万人余り、合計約20万人と推定される。また、約60万の沖縄県民のうち、犠牲者は12万人を超えるものと見られる。本土決戦の回避により、沖縄戦は日米戦争最後の地上戦となった。

現行版について次のような点の改善ないし記述の追加が行われるならば、いっそう沖縄戦の歴史についての理解が深まるのではないかと思います。

- (1) 住民をまきこんだ沖縄戦の実相を、最新の研究成果や住民の証言などをもとに、本文で記述されることをご検討いただきたく存じます。
- (2) 沖縄本島への米軍上陸は確かに4月1日ですが、「集団自決」が多く発生した慶良間諸島への攻撃はそれ以前に行われていることから、3月下旬から沖縄戦がはじまったとする記述が望ましいのではないのでしょうか。
- (3) なぜアメリカは55万もの大兵力をもって沖縄を攻撃したのか、アメリカ側の沖縄戦の位置づけが示されておりません。その点が明確になれば、沖縄戦の悲惨な状況と戦後の沖縄が置かれた位置と関係について理解が深まると思いますが、いかがでしょうか。
- (4) 日本の支配者側の沖縄戦の位置づけが示されていません。一般には、本土決戦準備のための持久戦といわれますが、沖縄を本土とは違う周縁部と位置づけ、その犠牲のうえに本土決戦を遅らせ、本土、言い換えれば天皇制を守るための方針だったとも言えます。このような関係がより明確に示唆される記述が望ましいのではないのでしょうか。
- (5) 沖縄戦の実相をより正確に学習するためには、戦闘の妨げやスパイ容疑を理由に、日本軍がおこなった住民虐殺の事実を記述してはいかがでしょうか。
- (6) 「・・・あるいは集団自決に追い込まれた住民もあった」とありますが、誰が「追い込んだのか」が曖昧な記述となっています。日本軍に「強制された・強いられた」というのが実態ではないのでしょうか。そのことがわかるような記述の工夫をしていただきたいと思います。
- (7) 日本軍による手榴弾配布の事実などを記述してはいかがでしょうか。そうすることで、多くの人が確信している「軍隊は住民を守らない」という沖縄戦の教訓がより鮮明になると思います。
- (8) 囲み記事の中に「・・・地上戦では軍・住民ぐるみの激しい抵抗を受け・・・」とあります。これでは住民が自発的に戦いに参加したように読めてしまいますが、これは事実と反するのではないのでしょうか。ご一考いただきたく思います。
- (9) 最近の研究では「集団自決」を「強制集団死」と表記するケースが多く見受けられます。「強制集団死」という用語の使用をご検討下さい。

なお、いわゆる「集団自決」については、2006年度の高校日本史教科書の検定で軍の強制を示す記述が削除されたところですが、2007年度の訂正申請において、当初の検定による記述の書き換えに若干の修正が行われ、注記においては「強制集団死」の用語の記述も認められました。また、慶良間列島における「集団自決」について元隊長がどのようにかかわったかをめぐる裁判においては、体験者の証言の積み重ねに

よって、軍による強制が十分にありえたことが判示されています。

以上に述べた点についてご理解いただき、適切な処置をとってくださいますよう、重ねてお願い申し上げます。

山川出版 『詳説日本史 改訂版』（日B 012）

貴社が発行する教科書『詳説日本史 改訂版』において、沖縄戦について次のように記述されています。

(本文) …、4月にはついに沖縄本島に上陸し、島民をまき込む3カ月近い戦いの末これを占領した。
(コラム) **沖縄戦** 沖縄本島の中部に上陸したアメリカ軍は、付近の2つの飛行場を制圧し、島を南北に分断した。この間、日本軍は特攻機を投入した航空総攻撃をおこなったが、アメリカ艦隊を沖縄海域から撃退することはできなかった。沖縄を守備していた日本軍は、アメリカ軍を内陸に引き込んで反撃する持久戦態勢をとったため、住民を巻き込んだ激しい地上戦となり、敗残兵や避難民は次第に島の南部に追い詰められていった。6月23日、組織的な戦闘は終了した。日本軍の戦死者は6万5000人に達し、一般県民も10万人以上が戦没した。沖縄県は1995年、沖縄戦で亡くなった全戦没者（アメリカ側も含む）の名を刻印した「平和の礎」を建設した。

現行版について次のような点の改善ないし記述の追加が行われるならば、いっそう沖縄戦の歴史についての理解が深まるのではないかと思います。

- (1) 「4月にはついに沖縄本島に上陸し」とありますが、これだと沖縄戦が4月にはじまったように生徒が誤解するのではないのでしょうか。沖縄戦は3月下旬の慶良間諸島攻撃・上陸ではじまっていますので、そのことを書く必要があるのではないのでしょうか。「集団自決」は慶良間諸島で多く発生していることから、このことは大切ではないのでしょうか。
- (2) コラムで沖縄戦の経過は書かれていますが、日本軍の強制による「集団自決」や「日本軍による県民の殺害」の事実が何も書かれていません。住民をまきこんだ沖縄戦の実相を、最新の研究成果や住民の証言などをもとに、本文で記述されることをご検討いただきたく存じます。
- (3) (2) で指摘したようなことを記述するにあたっては、沖縄戦の実相をより正確に学習するために、戦闘の妨げやスパイ容疑を理由に、日本軍が住民虐殺をおこなったことが理解できる記述としてはいかがでしょうか。
- (4) (2) で指摘したようなことを記述するにあたっては、日本軍による「壕追い出し」や「手榴弾配布」の事実などを記述してはいかがでしょうか。そうすることで、多くの人が確信している「軍隊は住民を守らない」という沖縄戦の教訓がより鮮明になると思います。
- (5) なぜアメリカは55万もの大兵力をもって沖縄を攻撃したのか、アメリカ側の沖縄戦の位置づけが示されておりません。その点が明確になれば、沖縄戦の悲惨な状況と戦後の沖縄が置かれた位置と関係について理解が深まると思いますが、いかがでしょうか。
- (6) 日本の支配者側の沖縄戦の位置づけが示されていません。一般には、本土決戦準備のための持久戦といわれますが、沖縄を本土とは違う周縁部と位置づけ、その犠牲のうえに本土決戦を遅らせ、本土、言い換えれば天皇制を守るための方針だったとも言えます。このような関係がより明確に示唆される記述が望ましいのではないのでしょうか。
- (7) 最近の研究では「集団自決」を「強制集団死」と表記するケースが多く見受けられます。「強制集団死」という用語の使用をご検討下さい。

なお、いわゆる「集団自決」については、2006年度の高校日本史教科書の検定で軍の強制を示す記述が削除されたところですが、2007年度の訂正申請において、当初の検定による記述の書き換えに若干の修正が行われ、注記においては「強制集団死」の用語の記述も認められました。また、慶良間列島における「集団自決」について元隊長がどのようにかかわったかをめぐる裁判においては、体験者の証言の積み重ねによって、軍による強制が十分にありえたことが判示されています。

以上に述べた点についてご理解いただき、適切な処置をとってくださいますよう、重ねてお願い申し上げます。

山川出版 『高校日本史B 改訂版』(日B 017)

貴社が発行する教科書『高校日本史 改訂版』において、沖縄戦について次のように記述されています。

孤立化した日本では、1945(昭和20)年4月、アメリカ軍が沖縄本島に上陸し、住民をまき込んですさまじい戦いとなり、死者20万人近くを出して、6月に終わった。

現行版について次のような点の改善ないし記述の追加が行われるならば、いっそう沖縄戦の歴史についての理解が深まるのではないかと考えられます。

- (1) 「4月、アメリカ軍が沖縄本島に上陸し」とありますが、これだと沖縄戦が4月にはじまったように生徒が誤解するのではないのでしょうか。沖縄戦は3月下旬の慶良間諸島攻撃・上陸ではじまっているので、そのことを書く必要があるのではないのでしょうか。「集団自決」は慶良間諸島で多く発生していることから、このことは大切ではないのでしょうか。
- (2) 沖縄戦について「住民をまき込んですさまじい戦いとなり」としか書かれていませんので、なぜ、「死者20万人近くを出し」たのか、ということがわかりません。さらに、日本軍の強制による「集団自決」や「日本軍による県民の殺害」の事実が何も書かれていません。住民をまきこんだ沖縄戦の実相を、最新の研究成果や住民の証言などをもとに、本文で記述されることをご検討いただきたく存じます。
- (3) (2) で指摘したようなことを記述するにあたっては、沖縄戦の実相をより正確に学習するために、戦闘の妨げやスパイ容疑を理由に、日本軍が住民虐殺をおこなったことが理解できる記述としてはいかがでしょうか。
- (4) (2) で指摘したようなことを記述するにあたっては、日本軍による「壕追い出し」や「手榴弾配布」の事実などを記述してはいかがでしょうか。そうすることで、多くの人が確信している「軍隊は住民を守らない」という沖縄戦の教訓がより鮮明になると思います。
- (5) なぜアメリカは55万もの大兵力をもって沖縄を攻撃したのか、アメリカ側の沖縄戦の位置づけが示されておりません。その点が明確になれば、沖縄戦の悲惨な状況と戦後の沖縄が置かれた位置と関係について理解が深まると思いますが、いかがでしょうか。
- (6) 日本の支配者側の沖縄戦の位置づけが示されていません。一般には、本土決戦準備のための持久戦といわれますが、沖縄を本土とは違う周縁部と位置づけ、その犠牲のうえに本土決戦を遅らせ、本土、言い換えれば天皇制を守るための方針だったとも言えます。このような関係がより明確に示唆される記述が望ましいのではないのでしょうか。
- (7) 最近の研究では「集団自決」を「強制集団死」と表記するケースが多く見受けられます。「強制集団死」という用語の使用をご検討下さい。

なお、いわゆる「集団自決」については、2006年度の高校日本史教科書の検定で軍の強制を示す記述が削除されたところですが、2007年度の訂正申請において、当初の検定による記述の書き換えに若干の修正が行われ、注記においては「強制集団死」の用語の記述も認められました。また、慶良間列島における「集団自決」について元隊長がどのようにかかわったかをめぐる裁判においては、体験者の証言の積み重ねによって、軍による強制が十分にありえたことが判示されています。

以上に述べた点についてご理解いただき、適切な処置をとってくださいますよう、重ねてお願い申し上げます。

山川出版 『新日本史 改訂版』(日B 018)

貴社が発行する教科書『新日本史 改訂版』においては、沖縄戦について次のように記述されています。

沖縄戦 戦いの敗色が濃厚となった1944(昭和19)年、日本軍が沖縄諸島の防衛を強化し、軍の要請受け、16歳から48歳までの男子が防衛隊などの名で動員され、陣地の構築や飛行場の設営作業をおこなった。1945(昭和20)年4月1日、米軍は沖縄本島に上陸した。6月に守備軍が全滅するまで、戦闘は沖縄全土を巻き込み、約3カ月間続いた。この間、日本軍は働ける男子のほとんどを、武器を持たない兵員である義勇軍として徴兵した。男子中等学校生は鉄血勤皇隊として戦い、高等女学校生らは看護要員として働き、悲惨な最期をとげた。沖縄戦で、日本軍は約9万人余りの戦死者を出し、非戦闘員の犠牲者は約10万人にもものぼった。

現行版について次のような点の改善ないし記述の追加が行われるならば、いっそう沖縄戦の歴史についての理解が深まるのではないかと考えられます。

- (1) 「1945（昭和20）年4月1日、米軍は沖縄本島に上陸した」とありますが、これだと沖縄戦が4月にはじまったように生徒が誤解するのではないのでしょうか。沖縄戦は3月下旬の慶良間諸島攻撃・上陸ではじまっていますので、そのことを書く必要があるのではないのでしょうか。「集団自決」は慶良間諸島で多く発生していることから、このことは大切ではないのでしょうか。
- (2) 沖縄戦の経過は書かれています、日本軍の強制による「集団自決」や「日本軍による県民の殺害」の事実が何も書かれていません。住民をまきこんだ沖縄戦の実相を、最新の研究成果や住民の証言などをもとに、本文で記述されることをご検討いただきたく存じます。
- (3) (2) で指摘したようなことを記述するにあたっては、沖縄戦の実相をより正確に学習するために、戦闘の妨げやスパイ容疑を理由に、日本軍が住民虐殺をおこなったことが理解できる記述としてはいかがでしょうか。
- (4) (2) で指摘したようなことを記述するにあたっては、日本軍による「壕追い出し」や「手榴弾配布」の事実などを記述してはいかがでしょうか。そうすることで、多くの人が確信している「軍隊は住民を守らない」という沖縄戦の教訓がより鮮明になると思います。
- (5) なぜアメリカは55万もの大兵力をもって沖縄を攻撃したのか、アメリカ側の沖縄戦の位置づけが示されておりません。その点が明確になれば、沖縄戦の悲惨な状況と戦後の沖縄が置かれた位置と関係について理解が深まると思いますが、いかがでしょうか。
- (6) 日本の支配者側の沖縄戦の位置づけが示されていません。一般には、本土決戦準備のための持久戦といわれますが、沖縄を本土とは違う周縁部と位置づけ、その犠牲のうえに本土決戦を遅らせ、本土、言い換えれば天皇制を守るための方針だったとも言えます。このような関係がより明確に示唆される記述が望ましいのではないのでしょうか。
- (7) 最近の研究では「集団自決」を「強制集団死」と表記するケースが多く見受けられます。「強制集団死」という用語の使用をご検討下さい。

なお、いわゆる「集団自決」については、2006年度の高校日本史教科書の検定で軍の強制を示す記述が削除されたところですが、2007年度の訂正申請において、当初の検定による記述の書き換えに若干の修正が行われ、注記においては「強制集団死」の用語の記述も認められました。また、慶良間列島における「集団自決」について元隊長がどのようにかかわったかをめぐる裁判においては、体験者の証言の積み重ねによって、軍による強制が十分にありえたことが判示されています。

以上に述べた点についてご理解いただき、適切な処置をとってくださいますよう、重ねてお願い申し上げます。

東書 『日本史A 現代からの歴史』（日A 011）

貴社が発行する教科書『日本史A 現代からの歴史』では、沖縄戦について次のように記述されています。

沖縄戦と沖縄占領

1945（昭和20）年3月下旬、アメリカ軍の大部隊が沖縄攻撃作戦を開始し、4月、沖縄本島に上陸した。日本の守備軍は、本土決戦準備のための時間かせぎを目的に、兵力や物資補給の見直しもなく、現地補給による持久作戦をとった。

沖縄の中学校や高等女学校などの生徒たちは、鉄血勤皇隊、ひめゆり学徒隊などに編成され、一般住民も地上戦に動員された。3か月におよぶ激しい戦闘ののち、6月末、守備隊の壊滅で沖縄は占領された。沖縄県民の犠牲は、戦争終結前後の餓死やマラリヤなどによる死者を加えると、15万人をこえた①。そのなかには、日本軍によって「集団自決②」においこまれたり、スパイ容疑で虐殺された一般住民もあった。アメリカ軍は上陸後、軍政をしき、沖縄はアメリカ軍の占領下に入った。

注(1) 沖縄戦による住民の死者は、当時の沖縄の人口の4分の1におよんだ。

注(2) これを「強制集団死」とよぶことがある。

注(3) 敵の捕虜になるよりも死を選ぶことを説く日本軍の方針が、一般の住民に対しても教育・指導されていた。

コラム 沖縄県渡嘉敷島「集団自決」（写真 墓の入り口で発見された幼い姉弟）

・・・日本軍はすでに三月二十日ごろには、三十名ほどの村の青年団員と役場の職員に手榴弾を二こずつ手渡し、「敵の捕虜になる危険性が生じたときには、一こは敵に投げ込みあと一こで自決しなさい」と申し渡したのです。・・・

いよいよ二十八日の運命の日がやってきました。・・・

およそ一千名の住民は一か所に集結させられました。玉砕（自決）のためです。死を目前にしながら、母親たちは子どもたちに迫っている悲劇的死について、泣きながらさとすように語り聞かせるのでした。もちろん幼い子どもたちには、共に死を遂げるこの意味がわかるはずありません。・・・

私たち兄弟も、男性として家族に対する責任意識があったと思います。自分たちを産んでくれた母親に最初に手をかけたとき、私は悲痛のあまり号泣しました。ひもや石を使ったと思います。愛するがゆえに妹と弟の命も絶っていきました。・・・（『戦争の真実を授業に』1988年より）

沖縄戦における日本軍の位置づけ、長期にわたる地上戦での住民の根こそぎ動員などによって大きな犠牲が生じたことに関して日本軍が果たした役割、日本軍による住民虐殺や集団自決の強制がおこったこととその背景などが簡潔ながら適格に記述されていること、さらに、沖縄戦体験者の文章をコラムで扱うなど貴重な資料をとりあげていることに敬意を表します。

そのうえで、現行版について次のような点の改善ないし記述の追加が行われるならば、いっそう沖縄戦の歴史についての理解が深まるのではないかと思います。

- (1) なぜアメリカは55万もの大兵力をもって沖縄を攻撃したのか、アメリカ側の沖縄戦の位置づけが示されておりません。その点が明確になれば、沖縄戦の悲惨な状況と戦後の沖縄が置かれた位置と関係について理解が深まると思いますが、いかがでしょうか。
- (2) 本土決戦準備のための時間かせぎを目的とした持久作戦という記述はありますが、日本の支配者側の沖縄戦の位置づけが明確には示されていません。沖縄を本土とは違う周縁部と位置づけ、その犠牲のうえに本土決戦を遅らせ、本土、言い換えれば天皇制を守るための方針だったとも言えます。このような関係がより明確に示唆される記述が望ましいのではないのでしょうか。
- (3) 「日本軍によって集団自決においこまれたり」とありますが、誰が「おいこんだのか」が曖昧な記述となっています。日本軍に「強制された・強いられた」というのが実態ではないのでしょうか。そのことがわかるような記述の工夫をしていただきたいと思います。
- (4) 日本軍により、「壕」を追い出され砲爆撃にさらされたり、戦闘の妨げになるとの理由で壕の中で虐殺されたりした住民がいたこと、また、日本軍による手榴弾配布の事実などを記述することで、多くの人が確信している「軍隊は住民を守らない」という沖縄戦の教訓がより鮮明になるとと思いますが、いかがでしょうか。

なお、いわゆる「集団自決」については、2006年度の高校日本史教科書の検定で軍の強制を示す記述が削除されたところですが、2007年度の訂正申請において、当初の検定による記述の書き換えに若干の修正が行われ、注記においては「強制集団死」の用語の記述も認められました。また、慶良間列島における「集団

自決」について元隊長がどのようにかかわったかをめぐる裁判においては、体験者の証言の積み重ねによって、軍による強制が十分にありえたことが判示されています。

以上に述べた点についてご理解いただき、適切な処置をとってくださいますよう、重ねてお願い申し上げます。

東書 『日本史B』（日B 004）

貴社が発行する教科書『日本史B』においては、沖縄戦について次のように記述されています。

空襲と沖縄戦（前略）1945年2月のヤルタ会談で、アメリカ・イギリス・ソ連の3国首脳は、ドイツ降伏後3カ月以内にソ連が対日参戦することなどを約束した（ヤルタ協定）。3月には、アメリカ軍が沖縄に上陸した。日本軍が沖縄戦を本土決戦準備のための時間かせぎと位置づけたため、一般住民を巻き込んだ地上戦が3か月以上も展開された。「鉄の暴風」といわれるほどのアメリカ軍の砲爆撃と、5月下旬に日本軍が司令部の首里を放棄して、本島南端部の一般住民避難地区に軍隊が撤退したために、多くの一般住民が犠牲になった。戦闘には兵役の対象外である男性の多くも軍隊の補助業務を行う防衛隊として、学生も男子は鉄血勤皇隊・女子は看護隊（ひめゆり隊）として動員された。沖縄戦における日本側の戦死者は約18万8000人、うち沖縄県民は12万人以上にのぼった。

また戦陣訓②によって投降することを禁じられていた日本軍では、一般住民にも集団自決が強いられたり、スパイ容疑や戦闘の邪魔になるとの理由による住民虐殺もおこった。

② 1941年1月に東条英機陸軍大臣から陸軍の将兵に出された訓示。捕虜になるよりも死を選ぶことを説いたもので、戦争中に玉砕や将兵・市民の自決を生み出す一つの原因となった。

図版 沖縄戦関係地図 白旗をかかげて壕から出てきた少女

コラム 沖縄戦の実態を究明する作業

住民を巻き込んで大規模な地上戦が展開された沖縄戦は、あまりにも悲惨であったので、その体験を「語れない」という状況が戦後も続いた。戦争体験者がみずからの体験を語り、それを聞き取って記録として残そうという作業は、ようやく1970年ごろになって自治体が主導することではじまった。以後、沖縄県では、体験記録運動が自治体単位で展開され、沖縄戦の実態の解明が進んだ。また、戦前の戸籍などの喪失によって正確な犠牲者数すら不明であったので、自治体によっては、全戸の聞き取り調査を実施し、犠牲者の実数と全氏名を究明しようとする作業も進んでいる。

図版 平和の礎（沖縄県糸満市）

沖縄戦に対する日本軍側の位置づけ、長期にわたる地上戦での住民の根こそぎ動員などによって大きな犠牲が生じたことに関して日本軍が果たした役割、日本軍による住民虐殺や集団自決の強制が起こったこととその背景などが、簡潔ながら的確に記述されていることに敬意を表します。また、戦後の体験記録運動についてコラムで記述されていることもユニークな試みであり、現在と結びつけて戦争の歴史を学ぶ一つの学び方を示唆しているものと考えられます。

しかしながら、現行版について次のような点の改善ないし記述の追加が行われるならば、いっそう沖縄戦の歴史についての理解が深まるのではないかと思います。ご検討いただければ幸いに存じます。

- (1) なぜあれだけの兵力をもって沖縄の奪取占領にアメリカは全力をあげたのかなど、アメリカ側の沖縄戦の位置づけが示されておりません。その点がより明確になれば、沖縄戦の悲惨な状況と戦後の沖縄が置かれた位置との関係について理解が深まるのではないのでしょうか。
- (2) 日本の支配者側の沖縄戦の位置づけとして、本土決戦準備のための時間かせぎとして記述されています。そのことはたいへん意義のあることだと思いますが、この事実は明らかに沖縄を本土とは違う周縁部と位置づけていることを意味します。いいかえれば天皇のいる本土の天皇制を守るために、本土決戦をできるだけ遅らせできれば避けるために、周縁部としての沖縄を犠牲にして最前線の戦いを行わせ、米軍の本土進攻を遅らせたこととなります。このような関係性がより明確に示唆されるような記述になることが望ましいのではないかと思います。
- (3) 戦場における住民（避難民）の犠牲が生じた実態、住民虐殺の実態、「集団自決」の背景と強制性の実態などについて、住民の壕追い出し、自殺用の手榴弾配布などの事例も含め、いっそう具体的に記述されるならば、理解がさらに深まるものと思われます。また、「集団自決」については、最近では「強制集団死」と表記する場合も多く見受けられます。この用語の使用についてもご検討ください。
- (4) こうした沖縄戦の実態全体をふまえて、沖縄県民のなかには、たとえば「軍隊は住民を守らない」という軍隊と戦争の本質にかかわる認識がかなり広く根づいているということも、一つの事実として示されるならば、戦争そのものについての理解が深まるものと思われます。

なお、いわゆる「集団自決」については、2006年度の高校日本史教科書の検定で軍の強制を示す記述が削除されたところですが、2007年度の訂正申請において、当初の検定による記述の書き換えに若干の修正が行われ、注記においては「強制集団死」の用語の記述も認められました。また、慶良間列島における「集団自決」について元隊長がどのようにかかわったかをめぐる裁判においては、体験者の証言の積み重ねによって、軍による強制が十分にありえたことが判示されています。

以上に述べた点についてご理解いただき、適切な処置をとってくださいますよう、重ねてお願い申し上げます。

東書 『新選日本史B』（日B 003）

貴社が発行する教科書『新選日本史B』においては、沖縄戦について次のように記述されています。

沖縄での戦い 1945(昭和20)年4月、アメリカ軍が沖縄に上陸し、2か月余りにわたって民間人をまきこんだ悲惨な戦いがくりひろげられた。日本軍のほかに、現地で召集された郷土防衛隊、男子中学生・師範学校生徒による学徒隊が戦場に送られ、師範学校女子部や高等女学校の生徒による「ひめゆり部隊」なども看護婦として従軍した。

沖縄の戦いでは、民間人がスパイの嫌疑などで日本軍兵士に殺害されるなどの悲惨な事態が各地でおこった。はげしい艦砲射撃と戦車、火炎放射器、手りゅう弾などで、沖縄島の南部はほとんど焼きつくされ、死者は、日本軍約10万人、沖縄住民約10万人、アメリカ軍1万3000人弱にのぼった。

歴史を探る 沖縄戦 《太平洋戦争の終局となり、国内で唯一の地上戦となった沖縄での戦争は、どのようにまた何のために戦われたのか考えよう。》

戦争の経過

1944(昭和19)年10月10日、アメリカ軍は、奄美大島、徳之島、沖縄諸島など南西諸島の全域を空襲した。予想される日本本土での戦闘を考えたとき、沖縄を占領することは不可欠のことであった。翌1945年3月、小笠原諸島の硫黄島を陥落させると、アメリカは沖縄への攻撃に向けて、ニミッツ司令長官のひきいる1000余隻の艦船、上陸部隊18万人余、後方支援部隊を加えると約55万人という大艦隊を、グアム島から発進させた。

4月1日、大艦隊は沖縄本島の西方海上に出現し、5万人の兵士が中部西海岸(嘉手納付近)に上陸を開始した①。このとき日本軍からの攻撃はなく、従軍記者アニー・パイルが「まるでピクニックのよう」と表現したような無血の上陸であった。上陸部隊は、その日のうちに北(読谷)飛行場と中(嘉手納)飛行場を占領した。2日後には、部隊は東海岸に達し、南北に長い沖縄本島は分断されてしまった。

① これより先、3月26日に、アメリカ軍は、慶良間諸島に上陸して攻撃を開始した。

日本軍の兵力は、沖縄本島と周辺諸島をあわせて、正規軍約10万人、現地召集の防衛隊と学徒隊を加えても12万人弱であった。しかも本土決戦の準備とされて、沖縄では持久戦の作戦がとられた。日本軍は、中南部の自然洞窟と起伏にとむ地形を利用して、首里の北の嘉数高地を中心とする線で反撃し、しばらく攻防がつづいた。しかし5月30日、アメリカ軍は首里を陥落させ、日本の主力部隊の大半が壊滅した。それにもかかわらず、日本は軍司令部を南部の摩文仁の洞窟内に移し、「最後の一兵まで抵抗する持久作戦を続行した。本土決戦の準備のための時間稼ぎであった。

戦争の惨状と日本軍の降伏

3万足らなくなった兵士と多くの住民が南下し、その途中でも、アメリカ軍の攻撃で多数の人たちが戦死した。南部のせまい島尻地区に、10数万の住民と日本兵がおしこめられる事態になった。人々は自然洞窟や墓などを避難壕としたが、アメリカ軍は火炎放射器と手りゅう弾によって、避難壕を攻撃した。このとき、日本軍に壕を追われた住民が、降りそそぐ弾のもとで死んだり、逃げ場を失って「集団自決」したりした。避難壕のなかでも、泣きやまぬ乳幼児が敵に発見されるとして殺されたりした。

6月23日、日本軍司令官らは自決し、ここに日本軍の組織的な抵抗はおわって、アメリカ軍は7月2日、沖縄作戦の終了を宣言した。しかし、各地にひそんでいた日本軍部隊は、散発的な抵抗をつづけ、沖縄の日本軍が降伏したのは9月7日であった。沖縄県民にとって、終戦は8月15日ではなかったのである。

戦争の犠牲者数

沖縄戦の犠牲者は、日本軍の死者約10万人、住民の死者約10万人、アメリカ軍の死者1万3000人弱とされる②。そのうち沖縄県民の犠牲者は、県出身の兵士もふくめて、12万人以上になると推定されている。このなかには、「鉄血勤皇隊」とよばれた男子学徒隊や、「ひめゆり部隊」など女子学徒隊の犠牲者もふくまれている。男子は通信や食料運搬のほか、弾薬運搬や武器をもつての切りこみなど、兵士と同様の任務をはたし、女子は各部隊の野戦病院に配置され、従軍看護婦と同じ任務をはたした。こうした学徒隊の犠牲は大きく、そのうちの約50%が命を失っている。

②沖縄戦の開始以前の1944年8月22日、沖縄から鹿児島へ疎開する学童を乗せた対馬丸が、アメリカの潜水艦によって撃沈されるという悲劇もあった。犠牲者は1484名、そのうちの反芻が学童であった。

図版 沖縄戦(地図) 墓のなかに避難した幼い姉弟 火炎放射器で攻撃するアメリカ兵
表 学徒隊の死亡者数

沖縄戦について「歴史を探る」コラムとして2ページをさき詳しく記述しておられることに敬意を表します。本文も含め沖縄戦における住民根こそぎ動員のなかでおこった悲惨な住民被害の実態や日本軍による住民殺害などの事実について記述しておられることは、高校日本史教科書として適切であると考えます。

しかしながら、現行版について次のような点の改善ないし記述の追加が行われるならば、いっそう沖縄戦の歴史についての理解が深まるのではないかと思います。ご検討いただければ幸いです。

- (1) なぜあれだけの兵力をもって沖縄の奪取占領にアメリカは全力をあげたのかなど、アメリカ側の沖縄戦の位置づけが示されておりません。その点がより明確になれば、沖縄戦の悲惨な状況と戦後の沖縄が置かれた位置との関係について理解が深まるのではないのでしょうか。
- (2) 日本の支配者側の沖縄戦の位置づけとして、本土決戦準備の時間稼ぎのため持久戦の方針がとられたと記述されています。そのことはたいへん意義のあることだと思いますが、この事実は明らかに沖縄を本土とは違う周縁部と位置づけていることを意味します。いいかえれば天皇のいる本土の天皇制を守るために、本土決戦をできるだけ遅らせできれば避けるために、周縁部としての沖縄を犠牲にして最前線の戦いを行わせ、米軍の本土進攻を遅らせたこととなります。このような関係性がより明確に示唆されるような記述になることが望ましいのではないかと思います。
- (3) 本文では米軍上陸を4月1日とし、注で3月26日の慶良間諸島への上陸を記載しておられますが、「集団自決」の問題の深刻さが広く知られるようになった現在、本文で沖縄本島上陸に先立つ慶良間諸島上陸の事実をあわせて記すことのほうが適切ではないかと思われまます。
- (4) 戦場となった沖縄において、なぜ住民（避難民）の犠牲がかくも多く生じたのかについて、その実態とともに日本軍の作戦との関係がより明瞭に示されることが望ましいのではないのでしょうか。
- (5) 「集団自決」について住民が「逃げ場を失っ」たためにおこったという趣旨で記述されていますが、多くの場合、事実上の軍政下におかれたなかで、決して捕虜になるなという住民に対する指示の徹底や手榴弾の配布なども含め軍の誘導と強制によって「集団自決」がおこったということが、多数の証言やそれにもとづく研究によって示されています。「集団自決」の背景と強制の実態などについて、こうした多くの証言などで示されている事実をふまえた記述とされることを望みます。それによって「集団自決」についてのより具体的な理解が深まるものと思われまます。また、最近「集団自決」を「強制集団死」と表記する場合も多く見受けられます。この用語の使用についてもご検討ください。
- (6) こうした沖縄戦の実態全体をふまえて、沖縄県民のなかには、たとえば「軍隊は住民を守らない」という軍隊と戦争の本質にかかわる認識がかなり広く根づいているということも、一つの事実として示されるならば、戦争そのものについての理解が深まるものと思われまます。

なお、いわゆる「集団自決」については、2006年度の高校日本史教科書の検定で軍の強制を示す記述が削除されたところですが、2007年度の訂正申請において、当初の検定による記述の書き換えに若干の修正が行われ、注記においては「強制集団死」の用語の記述も認められました。また、慶良間列島における「集団自決」について元隊長がどのようにかかわったかをめぐる裁判においては、体験者の証言の積み重ねによって、軍による強制が十分にありえたことが判示されています。

以上に述べた点についてご理解いただき、適切な処置をとってくださいますよう、重ねてお願い申し上げます。

実教出版 『高校日本史A 新訂版』（日A 008）

貴社が発行する教科書『高校日本史A 新訂版』では、沖縄戦について次のように記述されています。

沖縄戦

1945年3月下旬、沖縄の戦略的位置を重視したアメリカ軍は、約55万の兵力で沖縄攻略作戦を開始した。これに対し、日本の沖縄守備軍は9万6000の兵力だったため、一般県民を防衛隊に召集し、中学校などの男女生徒を鉄血勤皇隊や女子学徒隊などに編成した。守備軍は、本土決戦準備の時間稼ぎを目的に、徹底した持久作戦を採用したため、沖縄県民は3か月におよぶ地上戦にまきこまれ、「鉄の暴風」とよばれる激しい攻撃にさらされて多くの犠牲者をだした。

この過程で、日本軍による県民の壕追い出しやスパイ容疑による殺害、日本軍のくばった手榴弾などによる集団自害と殺しあいなどで、800人以上の県民が犠牲になった。こうして沖縄では、県民の4分1にあたるおよそ15万人が命を失うなか、6月末に沖縄守備軍はほぼ壊滅し、沖縄はアメリカ軍の占領下にはいった。

注(2) のちに「ひめゆり学徒隊」「白梅学徒隊」などと呼ばれた。

注(3) 厚生省援護局の調査では、沖縄県民の死者は一般住民約9万4000人、沖縄県出身の軍人・軍属（鉄血勤皇隊や女子学徒隊などを含む）約2万8000人とされているが、このほか、強制連行された朝鮮人の犠牲者や西表島への強制移住でマラリアに倒れた八重山地方などの住民もいた（戦争マラリア）。

また、本土や台湾への集団疎開途上で犠牲となった人々のなかには、こどもたちもいた。

写真 沖縄戦 米軍の攻撃を受ける首里市内の教会。1945年5月末。

沖縄戦に対する日本軍・米軍双方にとっての位置づけ、日本軍による少年・少女を含む住民の根こそぎ動員と虐待、住民の大規模な犠牲が生じたことについての日本軍の役割、日本軍による住民虐殺や集団自決

(自害)の強制の事実やその背景、また傍注とはいえ住民の犠牲者数とその内訳や死因、さらに朝鮮人の犠牲者の存在などが、簡潔ながら的確に記述されていることに敬意を表します。

さらに次の点についての改善ないし記述の追加が行われるならば、いっそう沖縄戦の歴史についての理解が深まるのではないかと考えられます。

- (1) 日本軍が、住民に対して米軍への恐怖心をあおり、米軍の捕虜になることを許さないなどと指導した事実を記述していただきたいと思います。
- (2) 「日本軍がくぼった手榴弾による集団自害と殺しあいなどで、800人以上の県民が犠牲となった」とありますが、日本軍の強制によって集団自決がおこったことが、より明確にわかる記述にしてください。また、最近の研究では「集団自決」を「強制集団死」と表記するケースが多く見受けられます。「強制集団死」という用語の使用をご検討下さい。
- (3) 日本軍にとっての沖縄戦の位置づけ、すなわち「本土防衛」のための捨て石とする方針であったこと、このことは日本軍が沖縄を本土と異なる周縁部とする認識に立っていたことを示しています。このことを明示していただきたいと思います。

(1)については、貴社『高校日本史B 新訂版』には記述されていることですし、(2)は文章表現上の、いわば技術的問題ですので、決して困難ではないと考えられます。これらの記述の改善ないし追加により、「軍隊は住民を守らない」という沖縄戦の教訓がより鮮明になり、また戦後の沖縄問題の根源を明確化できるものと考えます。ぜひご検討のうえ、適切な処置をとって下さいますようお願い申し上げます。

なお、いわゆる「集団自決」については、2006年度の高校日本史教科書の検定で軍の強制を示す記述が削除されたところですが、2007年度の訂正申請において、当初の検定による記述の書き換えに若干の修正が行われ、注記においては「強制集団死」の用語の記述も認められました。また、慶良間列島における「集団自決」について元隊長がどのようにかかわったかをめぐり裁判においては、体験者の証言の積み重ねによって、軍による強制が十分にありえたことが判示されています。

以上に述べた点についてご理解いただき、適切な処置をとってくださいますようお願い申し上げます。

実教出版 『高校日本史B 新訂版』（日B 013）

貴社が発行する教科書『高校日本史B 新訂版』においては、沖縄戦について次のように記述されています。

沖縄戦

1945年3月下旬、戦後のアジアでの沖縄の戦略的位置を重視したアメリカ軍は、約55万の兵力で沖縄攻略作戦を開始した。これに対し、日本の沖縄守備軍は9万6000の兵力だったため、一般県民を防衛隊に召集し、中学校などの男女生徒を鉄血勤皇隊や女子学徒隊などに編成した。守備軍は、本土決戦準備の時間かせぎを目的に、徹底した持久作戦を採用したため、沖縄県民は3か月におよぶ地上戦にまきこまれ、「鉄の暴風」と呼ばれる激しい砲撃と爆撃にさらされて多くの犠牲者をだした。

この過程で、日本軍は、県民を壕から追い出したり、スパイ容疑で殺害したりした。また、日本軍は、住民に対して米軍への恐怖心をあおり、米軍の捕虜となることを許さないなどと指導したうえ、手榴弾を住民にくばるなどした。このような強制的な状況のもとで、住民は、集団自害と殺しあいに追い込まれた。これらの犠牲者はあわせて800人以上にのぼった。こうして沖縄では、県民の4分の1にあたるおよそ15万人が命を失うなか、6月末に沖縄守備軍はほぼ壊滅し、沖縄はアメリカ軍の占領下にはいった。

注(2) のちに「ひめゆり学徒隊」「白梅学徒隊」などと呼ばれた。

注(3) 厚生省援護局の調査では、沖縄県民の死者は一般住民約9万4000人、沖縄県出身の軍人・軍属（鉄血勤皇隊や女子学徒隊などを含む）約2万8000人とされているが、このほか、強制連行された朝鮮人の犠牲者や西表島への強制移住でマラリアに倒れた八重山地方などの住民もいた（戦争マラリア）。

また、本土や台湾への集団疎開途上で犠牲となった人々のなかには、子どもたちもいた。

写真 沖縄戦 米軍の攻撃を受ける首里市内の教会。1945年5月末。

沖縄戦に対する日本軍・米軍双方にとっての位置づけ、日本軍による少年・少女を含む住民の根こそぎ動員と虐待、住民の大規模な犠牲が生じたことについての日本軍の役割、日本軍による住民虐殺や集団自決（自害）の強制的な事実やその背景、また傍注とはいえ住民の犠牲者数とその内訳や死因、さらに朝鮮人の犠牲者の存在などが、簡潔ながら的確に記述されていることに敬意を表します。

さらに次の点についての改善ないし記述の追加が行われるならば、いっそう沖縄戦の歴史についての理解が深まるのではないかと思います。

- (1) 「このような強制的な状況のもとで、住民は、集団自害と殺しあいには追い込まれた」とありますが、「このような強制的状況」をつくりだしたのが日本軍であることを明示していただきたいと思います。
- (2) 「手榴弾を住民にくばるなどした」とありますが、「手榴弾」と「集団自害と殺しあい」との関係が、必ずしも明瞭ではないように見えますので、記述を改善していただきたいと思います。
- (3) 関連して「追い込まれた」とある点について、「追い込んだ」のが日本軍であることを明示していただきたいと思います。
- (4) このことに関連し、「強制集団死」という用語を採用し、事の本質を明示していただきたいと思います。
- (5) 日本軍にとっての沖縄戦の位置づけ、すなわち「本土防衛」のための捨て石とする方針であったこと、このことは日本軍が沖縄を本土とは異なる周縁部とする認識に立っていたことを示しています。このことを明示していただきたいと思います。

これらの記述の改善ないし追加により、「軍隊は住民を守らない」という沖縄戦の教訓が、より鮮明になり、また戦後の沖縄問題の根源を明確化できるものと考えます。ぜひご検討のうえ、適切な処置をとって下さいますようお願い申し上げます。

なお、いわゆる「集団自決」については、2006年度の高校日本史教科書の検定で軍の強制を示す記述が削除されたところですが、2007年度の訂正申請において、当初の検定による記述の書き換えに若干の修正が行われ、注記においては「強制集団死」の用語の記述も認められました。また、慶良間列島における「集団自決」について元隊長がどのようにかかわったかをめぐる裁判においては、体験者の証言の積み重ねによって、軍による強制が十分にありえたことが判示されています。

以上に述べた点についてご理解いただき、適切な処置をとってくださいますよう、重ねてお願い申し上げます。

実教出版 『日本史B 新訂版』（日B 014）

貴社が発行する教科書『日本史B 新訂版』においては、沖縄戦について次のように記述されています。

敗戦

（前略）

1945年3月、硫黄島が陥落し、4月にはアメリカ軍は沖縄本島に上陸した。6月までつづいた戦闘で、鉄血勤皇隊・ひめゆり隊などに編成された少年・少女を含む一般住民多数が戦闘にまきこまれ、マラリア・飢餓による死者も少なくなく、約15万人の県民が犠牲となった。また日本軍により、戦闘の妨げになるなどの理由で県民が集団自決に追いやられたり、幼児を殺されたり、スパイ容疑をかけられるなどして殺害されたりする事件が多発した。

（写真） 沖縄戦

（注4）住民は米軍への恐怖心をあおられたり、捕虜となることを許されなかったり、軍とともに戦い軍とともに死ぬ（「共生共死」）ことを求められたりもした。

日本軍による少年・少女を含む住民の根こそぎ動員と虐待、住民の大規模な犠牲が生じたことについての日本軍の役割、日本軍による住民虐殺や集団自決の強制の事実やその背景などが、脚注を含めて簡潔ながら的確に記述されていることに敬意を表します。

さらに次の点についての改善ないし記述の追加が行われるならば、いっそう沖縄戦の歴史についての理解が深まるのではないかと考えられます。

- （1）米軍は3月下旬には慶良間諸島に上陸しています。その事実を記述していただきたいと思います。
- （2）「一般住民多数が戦闘にまきこまれ」とありますが、戦闘の過程でやむなくそうなったのではなく、日本軍が「まきこんだ」ことがわかる記述としていただきたいと思います。
- （3）「強制集団死」という用語を採用し、事の本質を明示していただきたいと思います。
- （4）「強制集団死」の過程で、日本軍が手榴弾を住民に配って「自決」を迫った事実などについても言及していただきたいと思います。
- （5）日本軍にとっての沖縄戦の位置づけ、すなわち「本土防衛」のための捨て石とする方針であったこと、このことは日本軍が沖縄を本土とは異なる周縁部とする認識に立っていたことを示しています。このことを明示していただきたいと思います。

これらの記述の改善ないし追加により、「軍隊は住民を守らない」という沖縄戦の教訓が、より鮮明になり、また戦後の沖縄問題の根源を明確化できるものと考えます。ぜひご検討のうえ、適切な処置をとって下さいますようお願い申し上げます。

なお、いわゆる「集団自決」については、2006年度の高校日本史教科書の検定で軍の強制を示す記述が削

除されたところですが、2007年度の訂正申請において、当初の検定による記述の書き換えに若干の修正が行われ、注記においては「強制集団死」の用語の記述も認められました。また、慶良間列島における「集団自決」について元隊長がどのようにかかわったかをめぐる裁判においては、体験者の証言の積み重ねによって、軍による強制が十分にありえたことが判示されています。

以上に述べた点についてご理解いただき、適切な処置をとってくださいますよう、重ねてお願い申し上げます。

三省堂 『日本史A 改訂版』(日A 012)

貴社が発行する教科書『日本史A 改訂版』においては、沖縄戦について次のように記述されています。

日本への空襲と沖縄戦

・・・沖縄では、1945年3月にアメリカ軍が上陸し、日本軍との戦闘が3か月間つづいた(沖縄戦)。この間、日本軍が多くの県民を防衛隊などに動員したうえに、生活の場が戦場となったため、県民の犠牲は大きく、戦闘の妨げやスパイ容疑を理由に殺された人もいた。さらに、日本軍の関与によって集団自決に追い込まれた人もいるなど、沖縄戦は悲惨をきわめた(注2)。

注2

沖縄県援護課によると、戦死者と戦闘による犠牲者は日本側約18万8000人であった。そのうち沖縄県民は12万以上で、うちわけは、軍人・軍属約2万8000人、軍夫などに動員された者約5万5000人、一般住民約3万9000人とされている。また最近では、集団自決について、日本軍によってひきおこされた「強制集団死」とする見方が出されている。

図版 沖縄戦 破壊されつくした那覇市内。

現行版について次のような点の改善ないし記述の追加が行われるならば、いっそう沖縄戦の歴史についての理解が深まるのではないかと考えられます。

- (1) なぜアメリカは55万もの大兵力をもって沖縄を攻撃したのか、アメリカ側の沖縄戦の位置づけが示されておりません。その点が明確になれば、沖縄戦の悲惨な状況と戦後の沖縄が置かれた位置と関係について理解が深まると思います。
- (2) 日本の支配者側の沖縄戦の位置づけが示されていません。一般には、本土決戦準備のための持久戦といわれますが、沖縄を本土とは違う周縁部と位置づけ、その犠牲のうえに本土決戦を遅らせ、本土、言い換えれば天皇制を守るための方針だったとも言えます。このような関係がより明確に示唆される記述が望ましいのではないのでしょうか。
- (3) 「日本軍の関与によって集団自決に追い込まれた人もいるなど」とありますが、「日本軍の関与」では、集団自決をひきおこした「日本軍の強制・誘導」という実態が後退してしまいます。また、「日本軍の関与によって」という遠回しな記述では、どのような関与なのかもわかりにくくなってしまっているのではないのでしょうか。「日本軍によって」とストレートな表現をすることが高校生の理解をたすけるものと思われまます。
- (4) 「集団自決に追い込まれた」とありますが、誰が「追い込んだのか」が曖昧な記述となっています。日本軍に「強制された・強いられた」というのが実態ではないのでしょうか。そのことがわかるような記述の工夫をしていただきたいと思います。
- (5) 日本軍により「壕」を追い出された住民がいたことや、日本軍による手榴弾配布の事実などを記述していただきたいと思います。そうすることで、多くの人々が確信している「軍隊は住民を守らない」という沖縄戦の教訓がより鮮明になると思います。

なお、いわゆる「集団自決」については、2006年度の高校日本史教科書の検定で軍の強制を示す記述が削除されたところですが、2007年度の訂正申請において、当初の検定による記述の書き換えに若干の修正が行われ、注記においては「強制集団死」の用語の記述も認められました。また、慶良間列島における「集団自決」について元隊長がどのようにかかわったかをめぐる裁判においては、体験者の証言の積み重ねによって、軍による強制が十分にありえたことが判示されています。

以上に述べた点についてご理解いただき、適切な処置をとってくださいますよう、重ねてお願い申し上げます。

三省堂 『日本史B 改訂版』(日B 015)

貴社が発行する教科書『日本史B 改訂版』においては、沖縄戦について次のように記述されています。

日本への空襲と沖縄戦

・・・沖縄では、1945年3月にアメリカ軍が上陸し、戦闘が3か月間つづいた（沖縄戦）。この間、日本軍が県民を組織して徹底抗戦したうえに、生活の場が戦場となったため、県民の犠牲は大きく、戦闘の妨げやスパイ容疑を理由に殺された人もいた。さらに、日本軍の関与によって集団自決に追い込まれた人もいるなど、沖縄戦は悲惨をきわめた（注2）。

注2

沖縄県援護課によると、戦死者と戦闘による犠牲者は日本側約18万8000人であった。沖縄県民は12万以上で、そのうちわけは、軍人・軍属約2万8000人、軍夫などに動員された者約5万5000人、一般住民約3万9000人とされている。また最近では、集団自決について、日本軍によってひきおこされた「強制集団死」とする見方が出されている。

現行版について次のような点の改善ないし記述の追加が行われるならば、いっそう沖縄戦の歴史についての理解が深まるのではないかと思います。

- (1) なぜアメリカは55万もの大兵力をもって沖縄を攻撃したのか、アメリカ側の沖縄戦の位置づけが示されておりません。その点が明確になれば、沖縄戦の悲惨な状況と戦後の沖縄が置かれた位置と関係について理解が深まると思います。
- (2) 日本の支配者側の沖縄戦の位置づけが示されていません。一般には、本土決戦準備のための持久戦といわれますが、沖縄を本土とは違う周縁部と位置づけ、その犠牲のうえに本土決戦を遅らせ、本土、言い換えれば天皇制を守るための方針だったとも言えます。このような関係がより明確に示唆される記述が望ましいのではないのでしょうか。
- (3) 「日本軍の関与によって集団自決に追い込まれた人もいるなど」とありますが、「日本軍の関与」では、集団自決をひきおこした「日本軍の強制・誘導」という実態が後退してしまいます。また、「日本軍の関与によって」という遠回しな記述では、どのような関与なのかもわかりにくくなってしまっているのではないのでしょうか。「日本軍によって」とストレートな表現をすることが高校生の理解をたすけるものと思われまます。
- (4) 「集団自決に追い込まれた」とありますが、誰が「追い込んだのか」が曖昧な記述となっています。日本軍に「強制された・強いられた」というのが実態ではないのでしょうか。そのことがわかるような記述の工夫をしていただきたいと思います。
- (5) 日本軍により「壕」を追い出された住民がいたことや、日本軍による手榴弾配布の事実などを記述していただきたいと思います。そうすることで、多くの人が確信している「軍隊は住民を守らない」という沖縄戦の教訓がより鮮明になると思います。

なお、いわゆる「集団自決」については、2006年度の高校日本史教科書の検定で軍の強制を示す記述が削除されたところですが、2007年度の訂正申請において、当初の検定による記述の書き換えに若干の修正が行われ、注記においては「強制集団死」の用語の記述も認められました。また、慶良間列島における「集団自決」について元隊長がどのようにかかわったかをめぐる裁判においては、体験者の証言の積み重ねによって、軍による強制が十分にありえたことが判示されています。

以上に述べた点についてご理解いただき、適切な処置をとってくださいますよう、重ねてお願い申し上げます。

清水 『高等学校 日本史A 改訂版』（日A 009）

貴社が発行する教科書『高等学校 日本史A 改訂版』においては、沖縄戦について次のように記述されています。

敗戦

1945年3月、アメリカ軍は硫黄島を陥落させ、同月末沖縄に殺到した。その後まもなくの4月、小磯内閣は退陣し、鈴木貫太郎内閣にかわった。本土防衛の最前線とされた沖縄は、県民のなかからも多くの犠牲者をだす苛烈な戦闘に巻き込まれ、6月には守備隊が壊滅した。

図版 沖縄戦

本島が苛烈な戦場となり、軍人・軍属・住民あわせて死者は18万8千人余、うち12万2千余が沖縄県民であった。味方である日本軍による県民の殺害・「集団自決」の強要などの悲劇も生じた。

現行版について次のような点の改善ないし記述の追加が行われるならば、いっそう沖縄戦の歴史についての理解が深まるのではないかと思います。

- (1) 図版の説明には「日本軍による県民の殺害・「集団自決」の強要」とありますが、住民をまきこんだ沖縄戦の実相を、最新の研究成果や住民の証言などをもとに、本文で記述されることをご検討いただきたく存じます。
- (2) なぜアメリカは55万もの大兵力をもって沖縄を攻撃したのか、アメリカ側の沖縄戦の位置づけが示されておりません。その点が明確になれば、沖縄戦の悲惨な状況と戦後の沖縄が置かれた位置と関係について理解が深まると思いますが、いかがでしょうか。
- (3) 日本の支配者側の沖縄戦の位置づけが示されていません。一般には、本土決戦準備のための持久戦といわれますが、沖縄を本土とは違う周縁部と位置づけ、その犠牲のうえに本土決戦を遅らせ、本土、言い換えれば天皇制を守るための方針だったとも言えます。このような関係がより明確に示唆される記述が望ましいのではないのでしょうか。
- (4) 図版の説明には「日本軍による県民の殺害」とありますが、沖縄戦の実相をより正確に学習するためには、戦闘の妨げやスパイ容疑を理由に、日本軍が住民虐殺をおこなったことが理解できる記述としてはいかがでしょうか。
- (5) 日本軍による「壕追い出し」や「手榴弾配布」の事実などを記述してはいかがでしょうか。そうすることで、多くの人が確信している「軍隊は住民を守らない」という沖縄戦の教訓がより鮮明になると思います。
- (6) 最近の研究では「集団自決」を「強制集団死」と表記するケースが多く見受けられます。「強制集団死」という用語の使用をご検討下さい。

なお、いわゆる「集団自決」については、2006年度の高校日本史教科書の検定で軍の強制を示す記述が削除されたところですが、2007年度の訂正申請において、当初の検定による記述の書き換えに若干の修正が行われ、注記においては「強制集団死」の用語の記述も認められました。また、慶良間列島における「集団自決」について元隊長がどのようにかかわったかをめぐる裁判においては、体験者の証言の積み重ねによって、軍による強制が十分にありえたことが判示されています。

以上に述べた点についてご理解いただき、適切な処置をとってくださいますよう、重ねてお願い申し上げます。

清水 『高等学校 日本史B 改訂版』(日B 016)

貴社が発行する教科書『高等学校 日本史B 改訂版』においては、沖縄戦について次のように記述されています。

(本文) 6月には沖縄本島が占領された。

(側注) 4月1日、本島に米軍が上陸、沖縄は本土で最大の戦場となった。

(写真の説明) **沖縄戦** 現地召集の郷土防衛隊、鉄血勤皇隊、ひめゆり隊など非戦闘員の犠牲者も多かった。また、軍・官・民一体の戦時体制のなかで、捕虜になることは恥であり、米軍の捕虜になって悲惨な目にあうよりは自決せよ、と教育や宣伝を受けてきた住民のなかには、日本軍の関与のもと、配布された手榴弾などを用いた集団自決に追い込まれた人々もいた。この沖縄戦ではおよそ12万の沖縄県民(軍人・軍属・一般住民)が死亡した。

現行版について次のような点の改善ないし記述の追加が行われるならば、いっそう沖縄戦の歴史についての理解が深まるのではないかと思います。

- (1) 沖縄戦について、本文ではなく側注と写真での説明が行われていますが、本文で扱う必要があるのではないのでしょうか。
- (2) (側注)で「4月1日、本島に米軍が上陸」とあります。米軍の本島上陸は4月1日ですが、「集団自決」が多く発生した慶良間諸島への攻撃・上陸はそれ以前に行われていますので、3月下旬から沖縄戦がはじまったということを書くことが、生徒の沖縄戦理解には望ましいのではないのでしょうか。
- (3) 写真の説明には「日本軍の関与のもと、配布された手榴弾などを用いた集団自決に追い込まれた人々もいた」とありますが、「日本軍の関与」「集団自決に追い込まれた」では、「集団自決」をひきおこした「日本軍の強制・誘導」という実態が後退してしまいます。住民をまきこんだ沖縄戦の実相を、最新の研究成果や住民の証言などをもとに、本文で記述されることをご検討いただきたく存じます。
- (4) 日本軍による「手榴弾配布」の事実は記述されていて良いのですが、日本軍による「壕追い出し」や「住民虐殺」の事実などを記述してはいかがでしょうか。そうすることで、多くの人が確信している「軍隊は住民を守らない」という沖縄戦の教訓がより鮮明になると思います。
- (5) 「日本軍による住民虐殺」を記述される場合には、沖縄戦の実相をより正確に学習するためには、戦闘の妨げやスパイ容疑を理由に、日本軍が住民虐殺をおこなったことが理解できる記述としてはいかがでしょうか。
- (6) なぜアメリカは55万もの大兵力をもって沖縄を攻撃したのか、アメリカ側の沖縄戦の位置づけが示されておりません。その点が明確になれば、沖縄戦の悲惨な状況と戦後の沖縄が置かれた位置と関係について理解が深まると思いますが、いかがでしょうか。
- (7) 日本の支配者側の沖縄戦の位置づけが示されていません。一般には、本土決戦準備のための持久戦といわれますが、沖縄を本土とは違う周縁部と位置づけ、その犠牲のうえに本土決戦を遅らせ、本土、言い換えれば天皇制を守るための方針だったとも言えます。このような関係がより明確に示唆される記述が望ましいのではないのでしょうか。
- (8) 最近の研究では「集団自決」を「強制集団死」と表記するケースが多く見受けられます。「強制集団死」という用語の使用をご検討下さい。

なお、いわゆる「集団自決」については、2006年度の高校日本史教科書の検定で軍の強制を示す記述が削除されたところですが、2007年度の訂正申請において、当初の検定による記述の書き換えに若干の修正が行われ、注記においては「強制集団死」の用語の記述も認められました。また、慶良間列島における「集団自決」について元隊長がどのようにかかわったかをめぐる裁判においては、体験者の証言の積み重ねによって、軍による強制が十分にありえたことが判示されています。

以上に述べた点についてご理解いただき、適切な処置をとってくださいますよう、重ねてお願い申し上げます。

第一 『高等学校 改訂版日本史A』（日A 014）

貴社が発行する教科書『高等学校 改訂版日本史A』では、沖縄戦について次のように記述されています。

日本の敗戦

アメリカ軍は1945年3月、首都東京に対する大規模な空襲をおこない（東京大空襲）、それ以降、全国の主要都市の空襲が激しくなった。4月には沖縄本島に上陸を開始した。沖縄戦で、日本軍は兵力不足をおぎなうために、一般住民を地上戦に動員したが、そのなかには、中学校などの生徒たちも含まれていた（注2）。6月、多くの犠牲者をだして沖縄は占領された。沖縄戦で県民を戦闘に利用したように、軍部は全国民あがての本土決戦で戦局の転換をはかることを強く主張したが、鈴木貫太郎内閣は、ソ連を通じて和平工作をすすめようとした。

注2 沖縄県下の中学校から男子生徒が「鉄血勤皇隊」として組織され、女学校から女子生徒が「ひめゆり学徒隊」など看護隊として動員された。

図版 沖縄戦 沖縄に上陸するアメリカ軍。沖縄戦では、一般住民を含む県民12万人が犠牲となった（「沖縄県援護課資料」）。このなかには、スパイ容疑や作戦の妨げになるなどの理由で、日本軍によって殺された人もいた。日本軍は住民の投降を許さず、さらに戦時体制下の日本軍による住民への教育・指導や訓練の影響などによって、「集団自決」に追い込まれた人もいた。

現行版について次のような点の改善ないし記述の追加が行われるならば、いっそう沖縄戦の歴史についての理解が深まるのではないかと思います。

- (1) 住民をまきこんだ沖縄戦の実相を、最新の研究成果や住民の証言などをもとに、図版の説明ではなく、本文で記述されることをご検討いただきたく存じます。
- (2) 沖縄本島への米軍上陸は確かに4月1日ですが、「集団自決」が多く発生した慶良間諸島への攻撃はそれ以前に行われていることから、3月下旬から沖縄戦がはじまったとする記述が望ましいのではないのでしょうか。
- (3) なぜアメリカは55万もの大兵力をもって沖縄を攻撃したのか、アメリカ側の沖縄戦の位置づけが示されておりません。その点が明確になれば、沖縄戦の悲惨な状況と戦後の沖縄が置かれた位置と関係について理解が深まると思います。いかがでしょうか。
- (4) 日本の支配者側の沖縄戦の位置づけが示されていません。一般には、本土決戦準備のための持久戦といわれますが、沖縄を本土とは違う周縁部と位置づけ、その犠牲のうえに本土決戦を遅らせ、本土、言い換えれば天皇制を守るための方針だったとも言えます。このような関係がより明確に示唆される記述が望ましいのではないのでしょうか。
- (5) 日本軍により「壕」を追い出された住民がいたことや、日本軍による手榴弾配布の事実などを記述してはいかがでしょうか。そうすることで、多くの人が確信している「軍隊は住民を守らない」という沖縄戦の教訓がより鮮明になると思います。
- (6) 「集団自決に追い込まれた人もいた」とありますが、誰が「追い込んだのか」が曖昧な記述となっています。日本軍に「強制された・強いられた」というのが実態ではないのでしょうか。そのことがわかるような記述の工夫をしていただきたいと思います。
- (7) 最近の研究では「集団自決」を「強制集団死」と表記するケースが多く見受けられます。「強制集団死」という用語の使用をご検討下さい。

なお、いわゆる「集団自決」については、2006年度の高校日本史教科書の検定で軍の強制を示す記述が削除されたところですが、2007年度の訂正申請において、当初の検定による記述の書き換えに若干の修正が行われ、注記においては「強制集団死」の用語の記述も認められました。また、慶良間列島における「集団自決」について元隊長がどのようにかかわったかをめぐる裁判においては、体験者の証言の積み重ねによって、軍による強制が十分にありえたことが判示されています。

以上に述べた点についてご理解いただき、適切な処置をとってくださいますよう、重ねてお願い申し上げます。

桐原 『新日本史B』（日B 011）

貴社が発行する教科書『新日本史B』の現行版において、沖縄戦について次のように記述されています。

アメリカ軍は…（中略）…、4月1日には沖縄本島に上陸した。軍部は、**沖縄戦**を本土決戦体制を整える時間かせぎのための作戦と位置づけ、最後の一兵まで戦うよう命じた。このため、全住民が戦禍にまきこまれ、一般住民が少なくとも約9万人以上も死亡した。そのほか、沖縄県出身の軍人・軍属約3万人や、マラリア・飢餓による犠牲、乳幼児の犠牲なども含め、沖縄県民の犠牲者数は、当時の県民の4分の1強にあたる15万人を上回るといわれる。これらの犠牲者のなかには、慶良間諸島の渡嘉敷島のように、日本軍によって「集団自決」を強要された住民や虐殺された住民もふくまれており、確認されている事例だけでも相当な数にのぼる。
(脚注) 軍属には**鉄血勤皇隊・ひめゆり隊**などに編成された少年少女もふくまれる。

沖縄戦に対する日本軍側の位置づけ、全住民が戦禍にまきこまれ大きな犠牲が生じたこと、日本軍による住民虐殺や「集団自決」の強制について、簡潔ながら的確に記述されていることに敬意を表します。しか

しながら、現行版について次のような点の改善ないし記述の追加が行われるならば、いっそう沖縄戦の歴史についての理解が深まるのではないかと思います。

- (1) 「4月1日には沖縄本島に上陸した」とありますが、沖縄戦は3月下旬の慶良間諸島攻撃・上陸ではじまっています。そのことを書かないと、後段で書かれている渡嘉敷島での「集団自決」が4月だと生徒が誤解するのではないのでしょうか。また、渡嘉敷島だけでなく座間味島にも言及された方が良いのではないのでしょうか。住民をまきこんだ沖縄戦の実相を、最新の研究成果や住民の証言などをもとに、記述をさらに充実されることをご検討いただきたく存じます。
- (2) なぜアメリカは55万もの大兵力をもって沖縄を攻撃したのか、アメリカ側の沖縄戦の位置づけが示されておりません。その点が明確になれば、沖縄戦の悲惨な状況と戦後の沖縄が置かれた位置と関係について理解が深まると思いますが、いかがでしょうか。
- (3) 「本土決戦体制を整える時間かせぎのための作戦」という確な指摘がありますが、それは、沖縄を本土とは違う周縁部と位置づけ、その犠牲のうえに本土決戦を遅らせ、本土、言い換えれば天皇制を守るための方針だったとも言えます。このような関係がより明確に示唆される記述が望ましいのではないのでしょうか。
- (4) 「虐殺された住民もふくまれており」とありますが、沖縄戦の実相をより正確に学習するためには、戦闘の妨げやスパイ容疑を理由に、日本軍が住民虐殺をおこなったことが理解できる記述としてはいかがでしょうか。
- (5) 日本軍による「壕追い出し」や「手榴弾配布」の事実などを記述してはいかがでしょうか。そうすることで、多くの人が確信している「軍隊は住民を守らない」という沖縄戦の教訓がより鮮明になると思います。
- (6) 最近の研究では「集団自決」を「強制集団死」と表記するケースが多く見受けられます。「強制集団死」という用語の使用をご検討下さい。

なお、いわゆる「集団自決」については、2006年度の高校日本史教科書の検定で軍の強制を示す記述が削除されたところですが、2007年度の訂正申請において、当初の検定による記述の書き換えに若干の修正が行われ、注記においては「強制集団死」の用語の記述も認められました。また、慶良間列島における「集団自決」について元隊長がどのようにかかわったかをめぐる裁判においては、体験者の証言の積み重ねによって、軍による強制が十分にありえたことが判示されています。

以上に述べた点についてご理解いただき、適切な処置をとってくださいますよう、重ねてお願い申し上げます。

東書『新編 新しい社会 歴史』(1997年版)(2006年版=歴史709)

貴社が発行する教科書『新編 新しい社会 歴史』の1997年版においては、沖縄戦について次のように記述されていました。

[戦場となった沖縄]

アジアでは、アメリカ軍が、東南アジア方面から北上して日本にせまり、1945(昭和20)年3月、沖縄が戦場になった。大規模な地上戦が行われた沖縄本島の南部はほとんど焼きつくされた。この戦争での沖縄県民の犠牲者は、県出身の兵士もふくめて、当時の沖縄県の人口のおよそ4分の1に当たる12万人以上にもなると推定されている。

沖縄戦では、一般の住民や、中等学校の男女生徒までもが、弾薬の運搬、負傷者の手当などに協力した。それにもかかわらず、住民のなかで、スパイの疑いと理由で日本軍に殺害されたり、集団自決をする人々があったなど、悲惨な事態が各地におこった。

図版 終戦直後の沖縄の人口

一方、現行の2006年版の記述はこのようになっています。

[日本の降伏]

日本軍は、1942(昭和17)年6月のミッドウェー海戦で大きな打撃を受け、東南アジアでも支配地を失っていきました。1944年には、サイパン島が陥落して本土への空襲が激化し、特に、1945年3月の東京大空襲では、8万人以上の市民が犠牲となり、100万人の人々が焼け出されました。また、物資や食料も極端に不足して、戦争を続けられなくなっていきました。

1945年3月、アメリカ軍は沖縄に上陸し、激しい戦闘が行われました。沖縄の人々は、子どもや学生をふくめて、多くの犠牲者を出しました。沖縄戦のあと、アメリカ軍は九州に上陸する用意を進めました。同時に連合国は、日本との戦争を終わらせる準備も進め、7月には、日本に無条件降伏を求めるポツダム宣言を発表しました。

図版 火炎放射器で攻撃するアメリカ軍(沖縄県) / (説明)この戦争での沖縄県民の犠牲者は、県出身の兵士もふくめると、当時の沖縄県の人口のおよそ4分の1に当たる、12万人以上と推定されています。

両者の比較もふまえて、いっそう沖縄戦の歴史についての理解を深めるためには、現行版について次のような点を改善することが望まれます。

(1) ともに3月からの米軍攻撃を扱っているのはよいのですが、1997年版には不十分ながらも記載されていた日本軍による住民殺害と「集団自決」が、2006年版には書かれていません。多くの犠牲者を出したこと、誰がどのような目的で行ったのかなどの記載が全くありません。教材として不備ではないでしょうか。

(2) なぜ、どのようにして住民にこれほど大きな犠牲が生じたのかについて、もう少し具体的にわかるような記述を加えてほしいと思います。現行版のような結論だけの記述では、沖縄戦の実相を中学生が理解するのは難しいと思われます。

(3) 1997年版の「年齢別人口構成」の図は、戦争の実像を学ぶために有効な資料だと思います。復活させることをご検討いただきたく思います。

なお、いわゆる「集団自決」については、2006年度の高校日本史教科書の検定で軍の強制を示す記述が削除されたところですが、2007年度の訂正申請において、当初の検定による記述の書き換えに若干の修正が行われ、注記においては「強制集団死」の用語の記述も認められました。また、慶良間列島における「集団自決」について元隊長がどのようにかかわったかをめぐる裁判においては、体験者の証言の積み重ねによって、軍による強制が十分にありえたことが判示されています。

以上に述べた点についてご理解いただき、適切な処置をとってくださいますよう、重ねてお願い申し上げます。

清水 『新中学校 歴史 改訂版 日本の歴史と世界』(1997年版)(2006年版=歴史712)

貴社が発行する『新中学校 歴史 改訂版 日本の歴史と世界』の1997年版においては、沖縄戦について次のように記述されていました。

つづいて4月1日、アメリカ軍は沖縄に上陸し、はげしい戦闘ののち6月にこれを占領した。沖縄戦では、住民約45万人のうち12万人が犠牲となった。

図2 沖縄戦 本島がはげしい戦場となり、県民の犠牲者のなかには、味方である日本軍によって殺されたり、強制されて集団自決した者もあった。写真は白旗をかかげる沖縄の少女。

一方、現行の2006年版の記述はこのようになっています。

つづいて4月1日、アメリカ軍は沖縄本島に上陸し、はげしい戦闘ののち、6月にこれを占領した。沖縄戦では、住民の12万人以上が犠牲となった。

図2 沖縄戦 県民の犠牲者のなかには、非戦闘員の人びとが多かった。なかには、強制されて集団自決した人もいた。写真は白旗をかかげる少女。

両者の比較もふまえて、いっそう沖縄戦の歴史についての理解を深めるためには、現行版について次のような点を改善することが望まれます。

- (1) なぜどのようにして住民の大きな犠牲が生じたかが、もう少し具体的にわかるてがかりになるような記述がほしいと思います。97年版も現行版の記述も、大きな結論だけは書かれていますが、具体性がとぼしく、中学生には理解しにくいように思われます。
- (2) また、なぜこのような大きな犠牲が生じたのかについて、日本の政府・軍の側の沖縄戦の位置づけや作戦との関係など、少しでもそのことを考えるきっかけになるような事実が示されるとよいのではないのでしょうか。
- (3) 米軍上陸と地上戦開始の時期については、2006年版で「沖縄本島」としたことによって4月1日との関係では正確になりましたが、「集団自決」が多く発生した慶良間諸島のことを考えると、やはり3月下旬から沖縄戦がはじまったとする記述が望ましいのではないのでしょうか。
- (4) 「集団自決」が強制されておこったものであることを明確に示していることは適切であると思いますが、強制の主語が示されていないのは理解を妨げることになります。また、最近「強制集団死」と表記する場合も多く見受けられます。この用語の使用についてもご検討ください。
- (5) 2006年版で日本軍による住民殺害の記述が消えたことは残念です。これはぜひ復活してほしいと思います。

なお、いわゆる「集団自決」については、2006年度の高校日本史教科書の検定で軍の強制を示す記述が削除されたところですが、2007年度の訂正申請において、当初の検定による記述の書き換えに若干の修正が行われ、注記においては「強制集団死」の用語の記述も認められました。また、慶良間列島における「集団自決」について元隊長がどのようにかかわったかをめぐる裁判においては、体験者の証言の積み重ねによって、軍による強制が十分にありえたことが判示されています。

以上に述べた点についてご理解いただき、適切な処置をとってくださいますよう、重ねてお願い申し上げます。

教出 『中学社会 歴史 未来を見つめて』（1997年版）（2006年版＝歴史 711）

貴社が発行する教科書『中学社会 歴史 未来をみつめて』の1997年版においては、沖縄戦について次のように記述されていました。

[戦場となった沖縄]

アメリカ軍は、1945年3月、沖縄に上陸した。沖縄では、中学生や女学生を含む2万5,000人の県民が守備隊に配属されるなど、激しい戦闘にまきこまれた。また、日本軍は、県民に軍のさまたげになるとして集団自決を強要したり、スパイ容疑で県民を殺害するなどの事件を起こし、多くの犠牲者を出した。沖縄戦は、59万人の県民のうち、死者が12万人以上になり、戦闘は9月7日まで続いた。

図版 沖縄戦 アメリカ軍の占領によって居住地を追われ、移動させられる住民たち。

一方、現行の2006年版の記述はこのようになっています。

[戦場となった沖縄]

1945(昭和20)年3月、アメリカ軍が沖縄に上陸しました。沖縄では、中学生や女学生をふくむ多くの県民が守備隊に配属されるなど、激しい戦闘にまきこまれました。沖縄戦では、当時約60万人の県民のうち、死者が12万人以上を数え、戦闘は日本の降伏後も1か月近くつづきました。

図版 アメリカ軍による洞窟への火炎放射 / ひめゆりの塔

両者の比較もふまえつつ、いっそう沖縄戦の歴史についての理解を深めるためには、現行版について次

のような点を改善することが望まれます。

- (1) 1997年版の記述にあった「日本軍は、県民に軍のさまたげになるとして集団自決を強要したり、スパイ容疑で県民を殺害するなどの事件を起こし、多くの犠牲者を出した。」の部分を復活していただきたいと考えます。そして日本軍が沖縄県民の命を守らないばかりか、多く殺害していった事実の明記が求められます。
- (2) なぜ、どのようにして住民にこれほど大きな犠牲が生じたのかについて、もう少し具体的にわかるような記述を加えてほしいと思います。現行版のような結論だけの記述では、沖縄戦の実相を中学生が理解するのは難しいと思われまます。

なお、いわゆる「集団自決」については、2006年度の高校日本史教科書の検定で軍の強制を示す記述が削除されたところですが、2007年度の訂正申請において、当初の検定による記述の書き換えに若干の修正が行われ、注記においては「強制集団死」の用語の記述も認められました。また、慶良間列島における「集団自決」について元隊長がどのようにかかわったかをめぐる裁判においては、体験者の証言の積み重ねによって、軍による強制が十分にありえたことが判示されています。

以上に述べた点についてご理解いただき、適切な処置をとってくださいますよう、重ねてお願い申し上げます。

帝国 『社会科 中学生の歴史 日本の歩みと世界の動き』（1997年版）（2006年版＝歴史 713）

貴社が発行する中学校社会科歴史分野教科書の1997年版においては、沖縄戦について次のように記述されていました。

戦場となった沖縄

沖縄で疎開がはじまったのは、1944(昭和19)年の夏以後のことです。日本本土や台湾へ、子供・女性・老人がつぎつぎと疎開していきました。それは、沖縄が日本軍とアメリカ軍の戦場になるおそれがあったからです。ところが同年8月、学童800人をふくむ疎開者1700人をのせた対馬丸が、アメリカの潜水艦によってしずめられました。こののち、沖縄の県民は疎開することに強い不安をいだき、戦場となる沖縄島には多くの人が残りました。

沖縄での戦いは、1945年の3月末からおよそ80日間つづきました。子供や老人・女性は、砲弾のふりそそぐ戦場をさまよい歩き、にげる場所も薬や医者の手あてもなく、飢えや病気、死のおそれになやまされるなど、想像もできないほどの苦しみを受けました。また、多くの人々が砲弾で傷つき、死にました。

このころ沖縄では、アメリカ軍の捕虜になることは日本人として恥だと、老人から学童にいたるまできびしく教えられていました。それで、はげしい戦闘にまきこまれた県民の多くが生きのびることに絶望して、一人あるいは集団での自決に追いこまれたり、または集団での自決を強制されたりしました。とくに、アメリカ軍が最初に攻撃した沖縄本島の近くにある慶良間列島での戦闘では、700人以上の県民が手投げ弾・鎌・小刀などで、家族ぐるみで自殺しました。

生き残った県民の心のなかには、いまでもこのいやすことのできない悲惨な沖縄戦の傷あとが、深くきざみこまれています。1995年には、沖縄での戦いでなくなった人を追悼するため、国内外すべての戦没者、23万4千人余りの名をきざんだ記念碑、「平和の礎」が作られました。沖縄の県民はいつも、永遠の平和がおとずれることを強く願っています。

苦しくなる食料捜し

畑に行っても、もう野菜なんて全然ないし、芋畑に行っても、芋もほとんどみつからないようになりました。ですから日を追うごとに、だんだんと遠くまで足をのぼすようになりました。芋畑を捜し、暗い夜のことでまったくの手さぐりです。まず芋のつるを捜したら手さぐりで根元の方をたどって、そこを古びた短剣で掘りますと、やっと親指ほどの小さい芋が一つ二つと出て来ます。それに芋の葉まで持ち帰り、1日1食、それも当時太平洋汁といって、汁の底に芋がやっと一切れ二切れ、その上にかざらすが、2、3枚浮くだけの食事が続きました。(『那覇市史』資料編第3巻7より)

図版 ①沖縄に上陸するアメリカ軍 ②アメリカ軍の進路 ③ひめゆりの塔(沖縄県那覇市) 看護婦として沖縄戦に参加し、戦死したおよそ200名の女学生と先生の慰霊碑として建てられました。④アメリカ軍にとらえられた少年兵

一方、現行の『社会科 中学生の歴史 日本の歩みと世界の動き 初訂版』2006年版の記述はこのようなになっています。

歴史の舞台⑩ 戦場となった沖縄

沖縄ではアメリカ軍の上陸が行われ、軍人だけでなく多数の住民が犠牲になりました。沖縄戦の経緯を確認しましょう。

太平洋戦争が始まると、沖縄県には多くの日本軍飛行場ができ、住民の土地がとりあげられ、健康な住民の多くが動員されました。1944年になると軍隊が配備され、子どもや老人は九州や台湾へ疎開させられました。その間、疎開する学童を乗せた対馬丸がアメリカの潜水艦によって沈められました。このほかにも、沖縄県民を乗せた多くの船が遭難しました。

1945年3月末、アメリカ軍が沖縄島をとり囲み、慶良間列島に上陸し、戦いがはじまりました。激しい戦いの末、5月には日本軍は戦闘能力を失い、住民が避難していた沖縄島南部に退きました。その結果、日本軍によって、食料をうばわれたり、安全な壕を追い出され、砲弾のふりそそぐなかをさまよったりして、多くの住民が死にました。

日本軍司令官は6月22日に自害し、日本軍の組織的な抵抗は終わりましたが、「最後の兵まで戦え」という命令が残っていたので、住民と兵士の犠牲は増え続けました。人々は集団死に追いこまれたり、禁止されていた琉球方言を使用した住民が日本兵に殺害されたりもしました。

また、八重山列島などではマラリア発生地にも移住させられたため、多くの病死者が出ました。

一家が全滅、あるいは家族に一人以上という割合で犠牲者を出した沖縄県の戦後は、遺骨収集からはじまりました。近年では戦争体験継承のための記録運動・戦跡保存・資料館づくりが地道に行われています。

図版 ①火炎放射器を使うアメリカ兵 ②沖縄で行われた地上戦 ③記録に残る家族たち 南風原町では、沖縄戦の被害状況の調査が行われました。その結果、全戸数1693戸中、269戸が一家全滅、194戸が父母とも死亡、1344戸が1人以上の死亡とわかりました。上の家系図は、そのうちのある家族の記録です。**④ふりそそぐ砲弾でつくられた穴 ⑤「平和の礎」** 国籍を問わず沖縄戦で亡くなった23万人の名前が刻まれています。一部の遺族は刻まれることをこぼみ、空白のままです。

沖縄戦について中学校教科書としてはたいへんくわしく記述していることに敬意を表します。

しかしながら、両年度版の比較もふまえて検討いたしますと、沖縄戦の歴史についていっそう理解を深めるためには、現行版について次のような点を改善することが望まれます。ご検討いただければ幸いです。

- (1) なぜこのような大きな犠牲が生じたのかについて、日本の政府・軍の側の沖縄戦の位置づけや作戦との関係など、少しでもそのことを考えるきっかけになるような事実が示されるとよいのではないのでしょうか。
- (2) 3か月にわたる地上戦のなかで、住民(避難民)がどのようにして死に追いやられたのか、もう少し具体的に示してほしいように思います。97年版ではある程度記述されていたように思われますが。
- (3) 06年版で「日本軍によって、食料をうばわれたり、安全な壕を追い出され、砲弾のふりそそぐなかをさまよったりして、多くの住民が死にました」と記述されたことは、なぜ住民の大きな犠牲が生じたかを具体的に理解するために役立つものと思います。いわゆる「集団自決」については、97年版では「集団での自決に追いこまれたり…強制されたりしました」と記述していました。06年版で「集団自決」ではなく「集団死」という用語を使ったことは意味のあることだと思いますが、「集団死」に追いこまれた」と書くのみで、どのようにして追いこまれたのかわからず、強制という語もなくなりました。なぜどのように「集団死に追いこまれた」のかを具体的に示し、それが事実上または明示的に強制されたものであることがわかるようにしてほしいと思います。また、最近では「強制集団死」と表記する場合も多く見受けられます。この用語の使用についてもご検討ください。

なお、いわゆる「集団自決」については、2006年度の高校日本史教科書の検定で軍の強制を示す記述が削除されたところですが、2007年度の訂正申請において、当初の検定による記述の書き換えに若干の修正が行われ、注記においては「強制集団死」の用語の記述も認められました。また、慶良間列島における「集団自決」について元隊長がどのようにかわったかをめぐり裁判においては、体験者の証言の積み重ねによって、軍による強制が十分にありえたことが判示されています。

以上に述べた点についてご理解いただき、適切な処置をとってくださいますよう、重ねてお願い申し上げます。

貴社が発行する教科書『中学生の社会科 歴史 日本の歩みと世界』の1997年版においては、沖縄戦について次のように記述されていました。

[日本の敗戦]

1945(昭和20)年3月末、アメリカ軍が沖縄に上陸し、はげしい攻防戦が約3か月わたってくり広げられた。沖縄では、日本軍が住民を地上戦のたてとしたのみならず、戦力にならない住民に集団自決を強制し、虐殺するなどした。沖縄戦での死者は20万を数え、日本軍兵士約9万人のほか、沖縄の一般住民9万人あまりが犠牲になったといわれ、その中には多数の中学生や女学生もいた。激戦の末、沖縄は占領され、日本の敗戦は決定的となった。(以下、略)

図版 アメリカ軍の沖縄上陸

一方、現行の2006年版の記述はこのようになっています。

[大戦の終結／沖縄・広島・長崎]

1945年3月になると、東京をはじめ、重要都市への大規模な空襲がはじまり、沖縄では、アメリカ軍とのはげしい地上戦が3か月にわたってつづいた。この戦闘には多くの中学生や女学生も加わり、敗退する中で集団自決する住民もいた。激戦の末、沖縄は占領され、日本の敗戦は決定的となった。アメリカ、イギリス、ソ連の首脳は、ドイツの降伏に先立って、ヤルタ会談を開き、ソ連の対日参戦などをきめていた。その後、ベルリン郊外のポツダムで会合し、中国を加えてポツダム宣言を発表し、日本に無条件降伏を求めた。以下略

図版 アメリカ軍の沖縄上陸 沖縄戦での死者は20万人を数え、日本軍兵士9万人のほか、沖縄の一般住民9万人あまりが犠牲になったといわれる。

両者の比較もふまえつつ、いっそう沖縄戦の歴史についての理解を深めるためには、現行版について次のような点を改善することが望まれます。

- (1) 1997年版には日本軍による「住民虐殺」や「集団自決」の強要についての記述が明確にされています。一方、2006年版では「住民虐殺」の記述はなくなり、「集団自決」も住民の自発的行為であるかのような記述となっています。沖縄戦の特徴である「日本軍は県民の命を守らない」という点が明確にされる記述に変更していただきたいと思います。沖縄が「捨て石」にされたことが明確に読み取れる記述が望ましいと考えます。
- (2) なぜ、どのようにして住民にこれほど大きな犠牲が生じたのかについて、もう少し具体的にわかるような記述を加えてほしいと思います。現行版のような結論だけの記述では、沖縄戦の実相を中学生が理解するのは難しいと思われます。

なお、いわゆる「集団自決」については、2006年度の高校日本史教科書の検定で軍の強制を示す記述が削除されたところですが、2007年度の訂正申請において、当初の検定による記述の書き換えに若干の修正が行われ、注記においては「強制集団死」の用語の記述も認められました。また、慶良間列島における「集団自決」について元隊長がどのようにかかわったかをめぐる裁判においては、体験者の証言の積み重ねによって、軍による強制が十分にありえたことが判示されています。

以上に述べた点についてご理解いただき、適切な処置をとってくださいますよう、重ねてお願い申し上げます。

日文 『中学社会 歴史的分野』(1997年版)(2006年版=710)

貴社が発行する教科書『中学社会 歴史的分野』の1997年版においては、沖縄戦について次のように記述されていました。

[沖縄の戦争]

1945年4月にはアメリカ軍が沖縄島に上陸し、日本軍は沖縄を本土防衛の捨て石として、中学生まで動員して戦いました。県民のなかにはスパイの疑いで日本軍に殺されたり、集団自決をせまられたりした人々があり、42万人の県民のうち12万2000人が死亡しました。6月に日本の主力軍が壊滅しても、戦闘は9月まで続きました。

図版 白旗をかかげる少女

一方、現行の2006年版の記述はこのようになっています。

〔戦場となった沖縄〕

1945年3月、連合国軍は沖縄に上陸を始めました。日本軍は、沖縄を本土の防壁として、中学生や女学生までを兵士や従軍看護婦に動員し、住民をもまきこんで戦いました。沖縄の南部は焼きつくされ、6月には日本軍の組織的な抵抗が終わりました。集団自決をせまられた人々もあり、沖縄県民の4人に1人が犠牲になるという、悲惨な結果になりました。

国民にはこうした戦争の情報が正しく伝えられず、政府は「本土決戦」と「一億玉砕」の決意をよびかけて、戦争を続けました。

(側注)犠牲者数は、病死者や餓死者をふくめると、軍人・軍属(ひめゆり学徒隊や健児隊に動員された中学生・女学生もふくむ)に住民を合わせて、12万人以上と推定されています。この犠牲者数は、本土からの兵士の犠牲者数を大きく上回りました。

図版 沖縄で捕虜となった少年兵

両者の比較もふまえつつ、いっそう沖縄戦の歴史についての理解を深めるためには、現行版について次のような点を改善することが望まれます。

- (1) 1997年版のアメリカ軍上陸が4月という誤った記述が2006年版では是正されています。一方、97年版に記載されていた「住民虐殺」「集団自決」の記述は、06年版では「住民虐殺」の記載はなくなり、「集団自決」も誰が迫ったのかという肝心の点が曖昧に記述されています。沖縄戦の最大の特徴である、日本軍が日本人である沖縄県民を殺害したという事実を明確に記述していただきたいと思います。
- (2) 97年版では「アメリカ軍」としていた記述が06年版では「連合国軍」と変更されています。その理由があれば教えていただきたいのですが、それ以上に、なぜアメリカ軍が日本を攻撃したのかという肝心の点の記載がありません。この点が分かるような記述にしていきたいと思います。
- (3) なぜ、どのようにして住民にこれほど大きな犠牲が生じたのかについて、もう少し具体的にわかるような記述を加えてほしいと思います。現行版のような結論だけの記述では、沖縄戦の実相を中学生が理解するのは難しいと思われます。

なお、いわゆる「集団自決」については、2006年度の高校日本史教科書の検定で軍の強制を示す記述が削除されたところですが、2007年度の訂正申請において、当初の検定による記述の書き換えに若干の修正が行われ、注記においては「強制集団死」の用語の記述も認められました。また、慶良間列島における「集団自決」について元隊長がどのようにかわったかをめぐる裁判においては、体験者の証言の積み重ねによって、軍による強制が十分にありえたことが判示されています。

以上に述べた点についてご理解いただき、適切な処置をとってくださいますよう、重ねてお願い申し上げます。